



教育思想史学会

第28回 大会プログラム

2018年09月08日(土) - 09日(日)

大阪大学

吹田キャンパス 人間科学研究科棟

主催：教育思想史学会 共催：大阪大学人間科学研究科

大会参加費

	一般	学生
会員	3500 円	2000 円
非会員	4000 円	2500 円

懇親会費

一般	学生
5000 円	3000 円

大会日程

09月08日(土)

09:30 ~	受付 (インターナショナルカフェ: 1階)
10:00 ~ 13:00	コロキウム1 (第31講義室) 「継承」の場が、より以上の記憶空間になる可能性 —「集団自決」の記憶を遺すチビチリガマの継承実践から—
	コロキウム2 (第32講義室) 〈教育思想史〉の誕生(3) —フランスにおける成立とドイツにおける展開—
13:00 ~ 14:15	第10期 理事会 [13:00~13:20]
	第9期 理事会・編集委員会 合同会議 (会議室A) [13:20~14:15]
14:20 ~ 14:30	奨励賞表彰式 (第51講義室)
14:35 ~ 16:20	フォーラム1 (第51講義室) 近代フランスにおける教養の揺らぎと再定式化 —技芸 (arts) の習得から「知」の教育へ—
16:35 ~ 18:20	フォーラム2 (第51講義室) エイミー・ガットマンの熟議民主主義的教育論の 教育思想史的再読
18:30 ~ 20:30	懇親会 (ポプラ通り 福利会館 レストラン「クルール」)

09月09日(日)

09:00 ~	受付 (インターナショナルカフェ: 1階)
09:30 ~ 12:30	コロキウム3 (第31講義室) 教育研究における東アジアのポジショナリティ
	コロキウム4 (第32講義室) 近代仏教と教育をめぐる学説史的研究・序説
13:30 ~ 14:15	総会 (第51講義室)
14:30 ~ 17:30	シンポジウム (第51講義室) 教育学としてのワイトゲンシュタイン研究 —現在の到達点と今後の展開—

「継承」の場が、より以上の記憶空間になる可能性 —「集団自決」の記憶を遺すチビチリガマの継承実践から—

企画者

高橋 舞(立教女学院短期大学)

司会者

岡部 美香(大阪大学)

報告者

金城 実(彫刻家)

知花 昌一(真宗大谷派僧侶)

高橋 舞(立教女学院短期大学)

昨年9月、「集団自決」の記憶を遺すチビチリガマが荒らされた。間もなく、沖縄県内の16~19歳の少年4人によるものと判明、逮捕に至ったものの、今回の損壊は致命的なものであると思われた。以前に荒らされた時には、ガマの前に設置された慰霊モニュメントを中心とした損壊であり、遺骨や遺品が眠っているガマ内部の損壊はまぬがれていたからである。今回の場合、損壊はガマ内部に集中し、遺骨も遺品も、めっちゃめっちゃに破壊されてしまった。しかも、「戦争の記憶」を手渡したい若者によって。遺族にとっても、チビチリガマを「継承」しようと守ってきた人々にとっても、世間一般の人々にとっても、この事件は大きな失意をもたらす事象として記憶されるはずだった。

ところが数ヵ月後、取材にはいった朝日新聞の記者に対し、チビチリガマの慰霊モニュメント製作者である彫刻家・金城実氏は、「いい場所になった・・・」と、答えた。この言葉は、「戦争の記憶」継承の在り方をテーマとし、戦争記憶空間の教育メディア効果に注目してきた企画者にとって、新しい発想であり、希望の言葉となった。

戦争を記憶する戦争記憶空間が、「継承」の場として、後退するのではなく、より豊かな空間になる可能性はあるのか、チビチリガマの「継承」に尽力されてきた金城・知花両氏に登壇いただき、直接その可能性をフロアの皆様と共に、探していきたい。

〈教育思想史〉の誕生(3) —フランスにおける成立とドイツにおける展開—

企画者

相馬 伸一 (佛教大学)

下司 晶 (日本大学)

司会者

下司 晶 (日本大学)

尾崎 博美 (東洋英和女学院大学)

報告者

相馬 伸一 (佛教大学)

綾井 桜子 (十文字学園女子大学)

河野 桃子 (信州大学)

「教育思想史」は、19世紀の国民教育の成立期において教員養成のテキストとして生まれた。そこで示された「教育思想家」の選択と系列化の視点は、今日の私たちの教育思想史認識、さらには教育一般に対する認識にも影響を与えているのであり、その検討は私たち自身の脱文脈化と再文脈化に欠くことができない。

今回のコロキウムでは、教育思想史それ自体の歴史にアプローチする意義を検討する。続いて、ヘイドン・ホワイトの『メタヒストリー』を教育思想史研究においていかに読解できるか問題提起を行う。

後半では、まずフランスにおける「教育思想史」の成立がとりあげられる。フランスにおける教育思想史テキストとしてはデュルケームのそれが知られるが、それ以前に現れたコンペーレのテキストも広く普及した。次いで、ドイツにおける「教育思想史」の展開が論じられる。ドイツにおける「教育思想史」はラウマーやシュミットによって書かれて以降、19世紀末から20世紀初頭にかけて、新教育(改革教育学)運動の展開と並行して変貌を遂げていった。

教職課程の再課程認定にともなうコアカリキュラムの導入のもとで、教育の理念・歴史・思想をいかに再構成できるかは、学問的課題であるとともに実践的課題でもある。フロアの皆さんと活発な論議を行っていきたい。

近代フランスにおける教養の揺らぎと再定式化 — 技芸 (arts) の習得から「知」の教育へ —

報告者

綾井 桜子 (十文字学園女子大学)

司会者

室井 麗子 (岩手大学)

近年、市場経済的な価値観を背景に、可視化、測定化する能力としての「コンピテンシー」が初等教育から高等教育に至るまで浸透し、知識の内実よりも、知識の活用、問題解決、処理技能が重視される傾向にある。高等教育界では、「国際教養」など、伝統的なリベラルアーツを再編する動きもみられるものの、「コンピテンシー型教養」、「21世紀型の教養」の登場にみるように、教養概念は一層、不透明さを増している。

わが国以外に目を転じてみるならば、「コンピテンシー」ベースの教育や「汎用的技能」の育成は、先進国共通の傾向であるとはいえ、これらが抱える問題を浮き彫りにするべく、教養概念が見直され、ポストモダンにおける教養の可能性が探究されてもいる。

本フォーラムでは以上のような現状認識に立ちながら、今日とは別の意味で、教養の揺らぎに直面したフランス近代に立ち返り、教養の揺らぎという事態を中等教育の文脈において省察した、デュルケームの『フランス教育思想史』を手がかりに、教養概念の再定式化について考察する。

近代フランスでは、伝統的な自由学芸を構成していた技芸 arts (読む術、書く術、説得の術、討論の術など) が教育的意味を失う一方、知性の涵養と一般的陶冶という新しい目的に向けて、教養の再定式化が進む。この過程で、かつての文法、修辞学、弁証法 (論理学) は、新しい言葉の知としてどう組み替えられていったのか、新興の科学の知、歴史の知は新しい目的にどう資するものとして考えられたのか、市民性の涵養をも目的とした、哲学という知の、学校教育への組み込みは、いかなる両義性を抱え、また、どのようなものとして、今日、評価し得るだろうか。

ここにみる教養の再定式化は、教育において教養という主題を考える一つの事例にすぎないが、教養という近代教育とは異質のオリジンを備える概念がもちえた知の内実とその人間形成的な意義について検討したい。

エイミー・ガットマンの熟議民主主義的教育論の 教育思想史的再読

報告者

平井 悠介 (筑波大学)

司会者

生澤 繁樹 (名古屋大学)

本発表は、エイミー・ガットマンが1990年代に構築した熟議民主主義的教育論と、2000年代中葉以降の大学論、および2010年代の政治論との関連性を探り、そこに見出される教育思想的含意を明らかにすることを目的とする。

自由の主体たる個人が平等なる社会を形成することはいかにして可能か。近代教育学批判にも通じる探究課題に対し、ガットマンは1980年代にリベラリズムの立場から民主主義に基づく教育論を構築して応答しようとした。その後、1990年代以降に熟議民主主義論と市民教育論との接合が試みられ、熟議への参加を通じて参加者が他者の声を聞き自己の選好や意思を変容させていくことに市民教育と平等なる社会の実現の契機を見出そうとする現代的視座が築かれていった。ただし、規範主義的な熟議民主主義的教育論の実現に向けては、現代の文脈に即したさらなる検討が必要とされる。

そこで本研究で着目するのが、デニス・トンプソンとの共著『妥協の精神』(2012年)で提示された「妥協」(compromise)である。ガットマンは、アメリカ民主主義を支えてきた政治的統治原理としての妥協の困難性と必要性とを過去の政策分析を通じて明らかにした。現実政治と原理論との接点を探る2010年代の新たな研究動向を検討することで、熟議民主主義の実現への展望が拓かれていく。

しかし、2000年代中葉以降のガットマンによる学術研究において、熟議民主主義的教育が積極的に論じていないことにも注意を払う必要がある。この空隙をうめるために、本研究では、ペンシルバニア大学学長として2004年以降にガットマンが発信、実践している大学観、および大学運営も検討していく。熟議民主主義的教育論が大学改革構想・運営にいかに関与され、また変質しているのか。こうした考察を経たうえで、あらためて1990年代の論を再読し、熟議民主主義的教育論の再評価を試みたい。

これらの試みは、不平等な社会構造の再生産に加担する近代教育を批判する潜在性と限界とをガットマン教育論に見出すこととともに、現代日本の教育と政治をめぐる諸課題を浮き彫りにすることへとつながっていく。

教育研究における東アジアのポジショナリティ

企画者

古波蔵 香 (大阪大学大学院)

上林 梓 (大阪大学大学院)

岡部 美香 (大阪大学)

司会者

岡部 美香 (大阪大学)

報告者

Ren-Jie Vincent Lin (National Taiwan University of Sport)

Jina Bhang (Myongji College, Korea)

古波蔵 香 (大阪大学大学院)

上林 梓 (大阪大学大学院)

近年、国際化・グローバル化の進展により、教育研究においても国民国家の枠組を越えた学術的交流がますます盛んになりつつある。これまで西洋のモデルの受容や模倣に傾きがちであった東アジアにおける教育研究にも、昨今では、東アジアの伝統が有する潜在的可能性を解明しようとする動き、あるいは東アジアの思想やフィールドから新たな教育理論・実践を発信しようとする動きがしばしば見られるようになってきた。一例として、2017年に開催された教育哲学会第60回大会の課題研究「東アジアに於いて「人間」であること」が挙げられるだろう。だが、ここでいう東アジアが「西洋によって発見された」ものであり、その伝統が「近代以降に創られた」ものでしかないとしたら、そうした教育研究は果たして東アジアというポジショナリティを十分に考慮しているといえるだろうか。そこで本コロキウムでは、台湾、韓国から若手研究者を招き、西洋との二項対立においてのみならず、東アジアのなかで相互に対比することを通して、教育(思想)史研究の主題および主体が有する東アジアの地誌的・地理的・地政学的なポジショナリティの問い直しを試みる。その場合、国民国家という枠組そのものもこの問い直しの俎上に載せられることになるだろう。なお、使用言語は英語と日本語である。

近代仏教と教育をめぐる学説史的研究・序説

企画者・司会者

眞壁 宏幹 (慶應義塾大学)

渡辺 哲男 (立教大学)

報告者

眞壁 宏幹 (慶應義塾大学)

渡辺 哲男 (立教大学)

田中 潤一 (大谷大学)

指定討論者

山本 正身 (慶應義塾大学)

近年、碧海寿広『入門 近代仏教思想』(ちくま新書)をはじめとして、若手研究者による近代仏教研究の蓄積が飛躍的に増加している。とりわけ、真宗大谷派の仏教哲学者である清沢満之とその系譜にあたる人びとに関する研究が多く刊行されている。また、その刺激を受けつつ、中島岳志『親鸞と日本主義』(新潮選書)なども刊行され、明治~大正期の、こうした人びとによる、いわゆる「親鸞(『歎異抄』)ブーム」の形成過程と、彼らが戦中に超国家主義に回収されていくという状況に、改めて注目が集まっている。企画者2名はもともと仏教研究に取り組んできたわけではないが、それぞれの研究の延長線上で、近代仏教、とりわけ真宗大谷派の動向に接近する必要があると考え、清沢が率いた「浩々洞」の刊行した月刊誌『精神界』の読書会を2年ほど続けてきた。本ラウンドテーブルでは、先行研究の成果やこれまでの読書会の成果を紹介し、また、ゲスト報告者(田中潤一氏)も加えて、この時代の教育学者が、「親鸞」や「聖徳太子」について盛んに論じていた事実にも触れるなどしながら、近代仏教と教育をめぐる学説史的研究の必要性を提起してみたい。

教育学としてのウィトゲンシュタイン研究 —現在の到達点と今後の展開—

司会者

丸山 恭司（広島大学）

報告者

杉田 浩崇（愛媛大学）

平田 仁胤（岡山大学）

山岸 賢一郎（福岡大学）

渡邊 福太郎（慶應義塾大学）

本シンポジウムでは、ウィトゲンシュタイン哲学がこれまで日本の教育学にどのように影響を与えてきたのかを検証し、現在どのような研究を切り拓きつつあるのかを確認する。

L. ウィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein, 1889–1951) は 20 世紀に最も影響力のあった哲学者の一人とされる。そして、いまなおその解釈は刷新され、言語学、心理学、社会学、文化人類学、教育学、法学など、様々な分野で応用が試みられている。ウィトゲンシュタイン研究において、これまで二つの大きな解釈論争があった。すなわち、1980 年代の規則遵守解釈論争と 2000 年代の治療的解釈論争である。特に前者は日本の教育学にも他者論的契機をもたらしている。

最近、ウィトゲンシュタイン研究と教育学の交差点において、注目すべき動向が生じている。関連単著が相次いで出版され（平田『ウィトゲンシュタインと教育』2013 年、渡邊『ウィトゲンシュタインの教育学』2017 年、杉田『子どもの〈内面〉とは何か』2017 年）、ウィトゲンシュタイン哲学の新解釈ならびに教育学を含む応用可能性を俯瞰する論集が出版された（荒畑靖宏・山田圭一・古田徹也編『これからのウィトゲンシュタイン—刷新と応用のための 14 篇』2016 年）。また、海外でも、ニュージーランドとカナダの教育哲学者が世界各地の哲学者と教育哲学者による 49 篇の論集を出版し (M. A. Peters/J. Stickney (eds.) A Companion to Wittgenstein on Education: Pedagogical Investigations, 2017.)、英国ウィトゲンシュタイン学会は“Wittgenstein and Education”をテーマに 2018 年次大会開催予定である。

いまウィトゲンシュタイン哲学の何が教育学的に重要であると考えられているのだろうか。シンポジウムの報告者はいずれも 2010 年代前半にウィトゲンシュタイン研究を教育学の学位論文としてまとめ（平田「言語使用の規範性の変容可能性に関する研究—ウィトゲンシュタインの言語ゲーム論を中心に」（広島大学、2010 年）、杉田「他者理解の機制に関する言語分析的研究—内面表出をめぐる言語ゲームの論理文法とその倫理的様態」（広島大学、2012 年）、山岸「教育という言語ゲームの内と外—他者論的視点から」（九州大学、2013 年）、渡邊「ウィトゲンシュタインの後期哲学に関する教育学的研究」（東京大学、2015 年））、その後も、ウィトゲンシュタイン晩期の学習論、ウィトゲンシュタインの「方法」に含意される教授論、言語ゲーム論を通じた道徳教育分析など、独自のテーマを追求する研究者である。本シンポジウムでは、各報告者が、どのような経緯・関心により教育学としてウィトゲンシュタイン研究を始めたのか、その研究内容はどのようなものであったのか、いま始めつつある研究の内容はどのようなものであり、何に応答し、何を切り拓こうとするものなのかを報告いただく。いわば、四つのライフ・ヒストリーと研究成果から、ウィトゲンシュタイン哲学がこれまで日本の教育学に与えてきた影響を検証し、現在どのような研究が拓かれつつあるのかを展望する。